

系 図

娘が身籠もつて子を産む

その子には胤がないため

養子をもらい

嫁が身籠もつて子を産む

嫁の子は

あちこちに胤を蒔き

母親の違う子が九人産まれる

母親の違う子たちは娘を娶り

男に嫁ぎ

四十五人の子が産まれる

四十五人の子らたちは娘を娶り

男に嫁ぎ

父親の違う子や

母親の違う子や

髪の色が違う子や

違うことばを喋る子らが

二百六十一人産まれる

二百六十一人の子たちは娘を娶り

男に嫁ぎ

あるいは娘を娶ることもせず

男に嫁ぐこともせず

日の出る国や

日の沈む国で

千三百二十三人が産まれる

ここまでは世間を騒がせた男や

火を点けて逃げた女もいて

どこからきたのか

もつとも

本家筋はどうに途絶えていて
系図はボロ布同然に
倉の内に眠り

ななが初めで

誰と誰がどう絡み合って
どう転がっていったのかなど
斟酌する余地もない

少しばかり財をなした男は

伽藍をめぐらせ

べたべた女の尻を撫で

女は女で

九十になっても

厚い口紅をさすことを

一時も忘れやしない

世界のどこかで

体に爆弾を巻き付け

多くの人で溢れかえる建物に突っ込み

自らの血肉とともに

数え切れないほどの人々の血肉を

一気に吹き飛ばす

そのとき自らの魂は

どこでなにをしているのか

吹き飛ばされた多くの人々の魂は

どこからどこにいったのか

いったいこれはなんだ

誰がそんなことを命じたというのか

部族の威信をかけて

なにかを得ようというのか

欲か、徳か、正義か、恨みか

英雄になるためにか

体に爆弾を巻き付けるとき

母の声は聞こえなかったか

恋人の声は聞こえなかったか

敵討ちの敵討ちのそのまた敵討ちの

敵討ちではないのか

爆弾を巻き付けるためだけに

生まれてきたというのか

体はうち震えなかったか

心はうち塞がれなかったか

流す涙は枯れ果ててしまったのか

戻ることのない車が動き出したとき

故郷の川のせせらぎは聞こえなかったか

恋人の声は聞こえなかったか

母の子守歌は聞こえなかったか

天上の音曲はなにも聞こえなかったか

どこからきたのか

光さす

天上からの真白な光に
洪水のごとく惜しげもなく
降り注いでくる光に
そのまま打たれるとき
天上のものと一体となる

天上からの光は
常に降り注いでいるというのに
頭の中に黒雲をつくり
疑念という嵐を起こし
怒りや我欲や迷いを発し
頭の上にコンクリートの覆いを
こしらえてしまふ

天上からの光は常に変わらず
まことに清らかに降り注ぐので

欲得でしか動くことのない身には
眩しすぎるのかもしれない
あるいは信じられず
見ることができないのかもしれない

光あれ

光あれと願う

世界が限りなく

一つに近くなり

距離も著しく

縮まったというのに

宗教や民族や部族の

主張激しく

こゝも排他排斥ばかりに

躍起になっているのは

単なる

わがままではないか

単なる

仇討ちに過ぎない

ではないか

単なる

もの盗りに過ぎない

ではないか

そんな

怪しげなものを

画策しようとする旗の下

己の意見を

しやりむりに

押し通そうとする

確かに

幾世紀の間

弾圧や搾取のときを

経てきたのかもしれない

どこからきたのか

今もいわれのない差別や
殺戮に見舞われて
いるのかもしれない

しかし

他を抹殺せよと

真の神ならば命ずるであろうか
目には目をと

真の神ならば命ずるであろうか

光あれ

光あれ

光あれかし

この哀しいものたちの

迷える魂を

光よ照らし

道筋を真っ直ぐに

整え示したまえ

光あれば

はるかな宙空から
光が到達する

百万燭光の電気が百万個

一瞬にはじけ

白いビームとなる

例えていえば

そんなことになる

光の速さを測る

モノサシなどないというから

強いて例えれば

そんなことになる

光のシャワーに

しとど濡れ

頭のとっぺんから爪先まで

しとどに濡れ

悲しい思いや

悲惨な出来事や

思い上がった略奪行為など

全てがしとどに濡れ

瞬時に全てが貫かれ

瞬時に全てが無きものになり

瞬時に全てが有るものになり

名 月

美しい形状の月が薄雲の間を

すごいスピードで駆ける

背景には澄み渡った空

すごいスピードだね

すごいスピードで駆けめぐって

いるのだね

地球と月という惑星同士の

物理運動だなどというと

情緒など失せてしまうと

このスピードは事実だろう

こんなに猛烈な早さで

互いの均衡を保ちながら

四六時中動いている

その中であって

山は動かず、故郷は変わらぬ

などというシャッターチャンス

をものにしたかのごとき情感を

人は生み出してきた

人は賢いというべきか

人は賢いというべきか

こんなに猛烈なスピードで

動き、変転しながら

冴えわたるほどに美しい形状を

ときには澄み渡った空に表し

すばらしいシャッターチャンス

をとらえ

天女でしかあり得ないものの姿を

くつきりと見せてくれる

宇宙論

まぶたを閉じると

まっすぐに倒れる棒が見える

水の上で倒れるときもあれば

屋根の上からポトリと落ちるときもある

君が詩人であるなら

あっさりとまぶたを閉じてみるがよい

一本の棒の中に

みどり色をした

足の生えた

髪の毛の生えた

翼の生えた

およそ実体のないものたちがいて

メロディとなり

煙の歌を歌い出すのだ

まぶたを閉じれば

決まっつて

まっすぐに倒れる棒が見える

約定のときになんと素裸で

なんとも豊かな乳房をもち

なんとも美しい唇をもち

なんとも艶やかな声をもち

おんなという名の

およそまことに心を惑わすものたちがいて

苦くて青いドライアイスとなり

奔流となつて溢れ出すのだ

まぶたを閉じると

きつと

まっすぐに倒れる棒が見える

どこからきたのか

星降る

都会の灯りの届かない

漆黒の闇では

星が間近にある

手を伸ばせば届きそうな

ところに浮かんでいて

よくお喋りをする

ほんのすぐ近くだし

囁き声でだって相手に届く

この頃人間はおかしくないか

昔からちつとも

変わりはないな

どうしたら、ああも強欲で

横暴で、冷血を賣けるんだ

あんまり見境がつかない

ままだと

今度もリセットだよな

星たちの話題は尽きない

だって、星たちは

ほんの近くから

何でも見てるし

何でもよく知っている

今夜も星たちのお喋りで

闇はぎらぎら輝き

陽気な星たちは

上に、下に、斜めに

時間、空間を突き抜け

気の向くままに

滑空を楽しんでいる

天象

荒々しい風が吹きすさぶという

冥界や天界を渡ってきたのであろう

一個の星

いや、一個の塊の

風雪に耐えてきた磨崖仏にも似た

表情をたたえた石が落ちてくる

疲れたのだ

もう、ようやく約束の

長い旅に終わりを告げるのだ

もう、ようやく自らが飛び込んだ

激しい闘いのくびきから

解き放たれるのだ

ガス雲などという

激しい思春期を過ごし

数え切れないほどの星々を束ね

はなばなしく

あたり中の星団を率いていたこともあった

考え得る限り凶暴な

時空という堅牢な岩を構え

血も涙もない

どこまでも冷酷無比な

どこまでも黒々とした

野望を抱いて燃え滾っていた

三十億年もの間一瞬として眠る間もなく

三十億年もの間一瞬として振り向くこともなく

三十億年もの間一瞬として飽くこともなく

その疲れは

たとえ、千人の裸婦を侍らせようとも

たとえ、天上の曲を雨と降らせようとも

固い殻を破ることはおろか

ひび割れ一つ

作ることさえできなかった

硬直した

鉄壁の砦には

一匹の蟻

一滴の露

一条の光の

なの一つ入り込む隙なく

凍て付いてしまった

しかし、超新星爆発などという

ビッグバンにも比類する

理不尽な破壊が待っていた

圧倒的に強力な

完璧なまでに冷徹な

しつぱ返しが待っていた

砦を失い

全てを失い

一個の星となり

一個の石ころとなり

命運の尽きた果てに戻るとい

懐かしいふるさとの

大気圏に突入し

骨灰と帰す

そのときを待っている

落魄の果て

いつの間にか

いや、いつときの間にか

磨崖仏にも似た顔をつぶされ

照れ笑いだけを浮かべ

ひたすら大気圏に突入する

そのときを待っている

無間

このつかの間の時間に
私は多くのことを
やりとおせねばならない

焼き場で

ただひとにぎりの骨灰となつて
かえつてくる地球の
ふしぶしのささめきを
疲れた

この疑似楕円軌道から
ゆるやかにとき放し
せめてなま温かい
時の笹鳴きの彼方に
後ろ向きに
投げ入れてやろうとする

かつて

糜爛した青臭い

食欲や性欲をみたしたという

蜥蜴や猿や

鱗木やアンモナイトなどという

卑小なものたちの

ささやかな老後の夢は

たったこれだけの

一片の死亡届で

ピンポン玉のごとくに

弾けとんでしまった

私は

カネテ病気療養中ノトコロヲ
などと書き送るつもりはない
なぐさめにもなりはしない

どこからきたのか

まん幕の張りめぐらされた
うす暗い部屋のかたすみで
冷えびえとかじかんた

私のミイラをなでながら
死に絶えてしまった

惑星たちの覚え書きを
あてのないタイムカプセルに
乗せようとする

(西暦何年などという
他愛のない奥付けを記そうか)
それにしても

今はいまからあとなのか
どこへ歩いていったか
などという

しらじらしい題目は
その十字路をかってに
ころがっていくがいい
今日のしがらみに

まつわりとどまろうとする
みずの流れのごとくに

まつわりつくことのできないことに
まつわりとどまろうとする
もろもろのミイラたちよ

ホトケたちよ
ガラスのごときものたちよ

足がない

手がない

口がない

耳がない

吹きとばそうとする亡者さえもない

なんという形象だ

底も、天井も

闇も、星たちも、

時のながれも

三十億光年の彼方に向けて
すでに

茫々となだれ果ててしまった

私はいま

刈られたすどい

手首の痛みに耐えながら

このおびただしい堆積物の中から

乱雑に散らされた過去帳の

ひとつひとつをめぐりだそうとする

はるかなゆかしい

心臓の所有者であつたものたちへ

うごめく

ひかりなどと呼ばれる実体であつた

ものたちへ

いま私は

ひとり心せきながら

いち枚の乾いたはなびらを

そらにながそうとする

どこからきたのか

山は青いか

山は青いか

太郎が見上げている

山は青いか

次郎が見上げている

山は青いか

三郎が見上げている

山は本当に青いか

ブラックホール

放蕩の限りを尽くし

暴虐の限りを尽くし

淫蕩の限りを尽くし

詐術を駆使した物盗りや

刃物や飛び道具や

怪しいクスリを用いた

容赦ない殺生などを

平気の平座でやってきた

国のため

家のため

名誉のため

地位のため

金のため

女のため

男のため

親のため

子孫のため

先祖のため

国家の安寧のため

部族の安寧のため

自らの安寧のため

教会の繁栄のため

などというあまたの口実で

放蕩の限りを尽くし

暴虐の限りを尽くし

淫蕩の限りを尽くしてきた

しかし今

一つの判定が下されようとしている

山影に幾本もの光が走り
にわかに地が揺れ動き
海がざわめきだした

人類の繁栄のため
未来の安寧のため

などという麗々しいことばが

発せられて幾久しいが

それらのことばが生みだし

それらのことばが穿ってきたものは

実に自らの足をどんでん

食いちぎることばかりではなかったか

間近に迫ってきている

巨大なものの姿は見えない

見たものなどいない

透明な空気や

透明な宙の彼方に

それはあるという

命あるものを

正しく権威あるものを

暴虐の限りを尽くした

猛々しいものを

愛しく美しいものを

巨大な神殿を

海を山を

月を星たちを

見えないものが

すつぽりと包み込んでしまう

見えないものが

すつと通り過ぎてしまう

見えないものが

見えないものそのままに

静かに通り過ぎてしまう

海の座標

はるかに遠い時を経て
はかりしれないほどの
あまたのいのちあるものを
育んできた

いのちあるものが生まれ
いのちあるものが水を切り
いのちあるものが陸にのぼり
いのちあるものが空にのぼった

いのちあるものが目覚め
いのちあるものが跳ね上がり
いのちあるものが歌うたい
いのちあるものが
いつしか永久の眠りにつく

風と接し
雲と接し
空と接し
月や星と接し
幾条もの水脈を引き

炎のごとく狂おしく荒れ
烈火のごとく怒り嗥り

なにごとともなかつたかのごとくに
鎮まり

幾日も幾日も
油を流したかのごとくに
穏やかにたゆたう

そんなはるかに遠い時を経て

はかりしれないほどの
あまたのいのちあるものを
育んできた

いのちあるものが生まれ
いのちあるものが水を切り
いのちあるものが跳ね上がり
いのちあるものが歌うたい
いのちあるものが
いつしか永久の眠りにつく

底の底には
いのちあつたものたちが
おびただしい骸となり
水のごとくに溶け合い

底の底から
新たないのちあるものが生まれ
いのちあるものが水を切り
いのちあるものが跳ね上がる

ときには烈火のごとく怒り哮り
空の高みまで

波濤をとばしたかと思えば
来る日も来る日も
油を流したかのごとくに
穏やかに澄み渡る

空と接し

幾条もの水脈を引き
月や星たちと

のんびりと話し込んだりもする

底の底では

骸たちが水のごとくに溶けゆき

底の底では新たに

いのちあるものが生まれつつあり

うつろい

知らぬ間に草が被い
知らぬ間に道が途絶える

かつて田圃に水を張り
かつて共同墓地の入口だった

ほんの五年ぐらいでこうだから
まして二十年后五十年後のことなどは
考えられない

今日明日のことに必死で
生きている

今日明日のことだけで
先のことにもまで思いが及ばない

心が非情になったのか

我が儘になってしまったのか

瞬時にニュースが駆けめぐり
瞬時に世界が動転する

アナログからデジタルへ

田圃にアナログを当てはめたとして
共同墓地にデジタルを当てはめたとして

明日のことも

五年後のこともわからない

今日明日のことだけに懸命で

先のことにもまで思いが及ばない

恐竜伝（一）

一億年もの風雪に耐え抜いた

巨大な議事堂の苔むした議場では

首相のツノメザウルスの長老が

いかめしい角をそびやかし

降り注ぐライトの中を

ゆつくりと演壇に歩み寄った

見よ、われわれの上に

戦禍の時代が過ぎて久しい

われわれ民族は

英知と、博愛と

血を啜るかのごとき犠牲とによって

永久の平和を確立した

神の姿に最も近い

われわれの前途には

果てしない永劫の未来が

約束されている

首相は

やおらこぶしを天に振り上げ

カメラのフラッシュが

燦然と焚かれる瞬間に身構えた

燦然と

燦然と

その地鳴りのごとき

瞬間が焚かれた

恐竜伝 (二)

いつもの夕暮れは

すぐそこまでできていた

薄野には

やわらかい風が

静かに吹きわたっていた

神の姿に最も近い

といわれる

アニメサウルスの街では

林立するビルの

屋上に立てば

薄野の風景も

エンジン音を

たてることなくすべりゆく

勤め帰りの車の列も

手に取るごとく

間近に見えた

ことばを発することなく

意志の伝達をすることができ

よって民族間の

トラブルは霧消し

トラブルといえるのは

髭が伸び過ぎ

舌が肥え過ぎた

ということぐらいだった

精神に破綻をきたす

者もなく

悪性腫瘍や

インフルエンザや

動脈硬化などという病は
とうに過去のものとなった

衣食にもこと欠くことなく
地が揺れ

水がおどるといふことなど
聞いたこともないから

平均寿命は

八百歳をとうに越えている

たまに老眼を過信し

階段を踏み外したりして

転げ落ちたりするのが

死因の第一位で

後は寿命を待つ

ほかない

神の姿に最も近い

といわれる

アニュメサウルスたちは

選ばれた種としてのの
誇りを胸に

種をあげた技術と知力の
限りを尽くし

雲を突き抜け

天にまで至ろうとする

塔を無数にこしらえてきた

神の姿に最も近い

といわれる

アニュメサウルスにとっては

それはしごく

当然のことで

国民会議が

総力をあげて策定した

新たな塔が

十年の歳月を経て

竣功し

今夕

お披露目をするため

薄野を眼下に見下ろす

位置に

アニヌメサウルスの長が立ち

感謝の祈りを

始めようとしていた

〈食らうがいい〉

〈食らうがいい〉

と眠たそうな声が

どこからか歌い始め

〈ふむふむ〉

と波のごとくに笑い始めた

と、いきなり空が裂け

おどろおどろしい声が

〈去れ〉

とももの憂げに囁いた

と思うと

胸を轟かせながら

新しい塔を見上げていた

臨月のアニヌメサウルスたちは

そのまま

前脚を二つに折った

そのままの姿勢で

化石した